

Title	トポス論の間主観的考察（その２）：社会福祉実践における「場」の解明のために
Author(s)	牛津, 信忠
Citation	聖学院大学論叢, 第 24 巻(第 1 号), 2011.10 : 137-159
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3325
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈原著論文〉

トポス論の間主観的考察（その2） ——社会福祉実践における「場」の解明のために——

牛 津 信 忠

Inter-subjective Studies of Topos Theory (part 2):
Elucidation of Fields in the Practice of Social Welfare

Nobutada USHIZU

- 1 トポスについての基本的考察——アリストテレスにおけるトポス論からの展開
- 2 日本における「場所の論理」
- 3 間主観性論の基礎考察——トポス論の具体化のために
(本論は、紙幅の都合上〔その1〕及び〔その2〕に分割される。
以下の章は〔その2〕として本号に掲載。)
- 4 関係性の論理としての「トポス（場所）論」——福祉実践の場を例示とする考察
- 5 場所論における主体性論——福祉的主体論の欠如を内省する
- 6 間主観的トポス論の展開可能性——相互主体的な生^{せい}：包み込み合う存在性
結び 福祉実践の場としてのトポス的な情況

Human existence consists of intersubjective relations. They include interactions between egological subjects and integration of a true personal subject.

The ambivalences caused by the relations between two subjects constitute the essence of human existence, i.e. real and comprehensive situations of Topos in human existence.

Both domains mentioned above, i.e., the intentional egological world and the world or places which subsume it, form a process directed toward the whole world from the base of human existence.

As egological situations actually, continuously occur in ordinary human situations, the two areas described above aim at subjective integration based on predicate generalization in relation to personal circumstances.

We cannot easily detect phenomena aiming at expansion of the domain of the ego at the margin

between the ego and the world of predicate generalization.

We are not often conscious of our continuous lack of awareness of these phenomena.

Our egological existence is surely included in the conscious world of the predicate.

Moreover, from the perspective of intersubjectivity and uncertainty within ambivalence we find the possibility of individual self-identity, social identity, and religious unity which subsume the former egological subjects.

Furthermore, intersubjective relations between the fields of true subjective personalities and egological fields are formed.

Only through the process of the formation of these interdependent relations, or intersubjectivity, can we discover the human perspective of the 'stark existence [être brut]' (Merleau-Ponty) of the essence of humanity.

This is the essence of human existence.

We realize that Topos continuously exists as a comprehensive core of totality within such a perspective.

That is to say, Topos can justly be said to be the crucial focus point of existential issues.

Topos, either opened or closed in the phenomenal world, is the core leading interactions of intersubjectivity to a certain consistency. The characteristics of the opened or closed Topos determine the perspectives of our existence. We can say that an opened Topos is vital for the continuity of perspective.

Due to these considerations, we realize that, in order to solve many social (welfare) problems, we have to study Topos as the core within the perspectives of a person's existence.

Key words; Intersubjectivity, Topos, Topica

Key words; 包摂, 人格主体, 自我主体

1-3の各章については同紀要(その1)における下記の章を参照されたい

1 トポスについての基本的考察——アリストテレスにおけるトポス論からの展開

2 日本における「場所の論理」

3 間主観性論の基礎考察——トポス論の具体化のために

4 関係性の論理としての「トボス（場所）論」——福祉実践の場を例示とする考察

① 福祉実践領域の間主観的把握の問題点

ワーカーはその自我論上の主体による援助技術上の客観的諸対応を通じて、クライアントが直面する生活問題の解決へと向かい実践を展開していく。前章の後半部分の記述は、生活支援を必要とする人への個別援助の態様について、多様な方途的展開はあるもののその軸芯部分を集約的に表現している。こうした方途上の差異を認識しながらも、この章においては、支援対応のための相互作用の内容を具体において取り上げていくことにする。それによってわれわれは、傾聴の相手、ストレンクス（strength）の相手、明確化や感情への対応をなす相手等といったクライアントに相對することによって生じている対象化、特にそこに生じる物化的対象化を内省し、その在り方について熟考すべきことを感じざるをえない。それにより人としての尊厳が損なわれ、その人の内側の可能性を損なうことにならないかという疑念が想念されるからである。

われわれはそこに生じるワーカーとクライアントの間における間主観が、単なる相互関係主義に終わってはいないかという検証から始めて、それが前章の一節に示した心理学上の科学主義（それからの離脱について顕著な試みがあるが）故の人間の客体視、直言すれば、物化的対象化に終始していないかということを検証していくことにしよう。

物を見つめる視座でクライアントを冷静にないし科学的に見据える。そこには、ワーカーとクライアントとの間における相互性があるようで、ワーカーが自己の目途にクライアントに従わせるという意味における自己主観への取り込みと支配力の行使に終わる行為が垣間見えることがある。こうした状況については度々専門性の弊害として警鐘が鳴らされてきた。専門的行為を遂行しているつもりで、いつのまにかソーシャルワーカーはこの関係状況に陥る危険性のなかにある。専門性という名のもとに、科学的にクライアントに対応すればするほど、ワーカーはこの罠から逃れることが困難になる。

この事態からの離脱は、福祉実践に際して絶えざる内省を必要とするところであり、これについては既に「共感的共同の現象性と基底について」（聖学院論叢 22 巻 2 号）と題する拙稿においても触れた。われわれはそれを援助技術の実態に即して問いつつ、そこに見られる主体と客体における、また主観主義と客観主義との揺らぎのなかで、志向性や両義性を福祉実践と関連させて理解しようとしてきた^①。ほとんど全てのワーカーが、専門教育を受け、或いは豊富な経験に支えられ、謙虚に冷静にクライアントに真向かって、問題解決の支援者であらうとしている。しかし、その謙虚さや冷静さのなかにも、それをなし得る自己の技法的能力特性への過信や絶対視、さもなければ、それへの依拠以外になす術もない対応状況にあり、相手としてのクライアントの物象化に陥る危険を拭えない。

さて、物化的対象化からの離脱は、いかにすれば可能となるのか、われわれは、それが真の間主観性に立つことにより可能となると考えている。しかし「真の」という表現は、きわめて危険である。その名の下で専門性という名の上記の自己絶対視へと陥っていく、この繰り返しに終始する。ここでは間主観という名における「単なる従属的相互性」からの離脱が求められることに注視しておく。その克服の基本理念は既に前章（[その1]第3章）において述べられている。それは主観と主観が、まさに主体的相互関係性を結ぶときに可能となる。主体としてのワーカーが、問題を抱える他者の主体性を理解の次元でとらえ、その主体性がまさに発揚されていくときに、物象化からの離脱が開始される。その開始に辿り着くために、そこに形成される福祉実践者と支援を必要とする人との相互関係の基底には、どのような存在の態様が考えられるのであろうか。

こうして、糸口に辿り着くという志向性に基づく行為と同時に、本質的相互性の基底という存在の場そのものを、さらに問う作業が求められることになる。

② トボス論的考察の必須

上述されてきたのは、中心的には対人援助技術領域についての考察である。しかし、社会福祉における人間の生活問題へのアプローチには、そのパーソナルな関係性（個的及び集团的）に帰着する事柄を閉じた形で問うのみならず、物理的環境を含む地域社会との相互性をもたらし問題情況、制度的環境をもたらし問題情況、そのほか文化・教育環境や経済環境上等の諸種の問題群を対象にして、広く問題を取り巻き、それを包み込む「場」が問われねばならない。その場の解明のためには、如何なる場であってもそれと通底している存在の情況が問われ、それが方向づけられる志向性の流れと、とくにその真髄と当該情況とがどのような関係性のもとに置かれるかが問われねばならない。例えば物理的環境としての関係の基底性がある場合、それが人間にとって如何に基底적であるのか、人間の意識に本質還元されることが求められる。また、それが制度的な基底性を持つ場合も同様である。人間の個的、集团的関係性に於いてはもちろん言わずもがなである。このようにその基底的な場が、人間の意識に還元され、総合化され人間学的に問われることが求められるのである。われわれは、これを、別稿に於いて、その個的意識の底流に在るものとして、自他未分化の体験流（シェーラー, M.）、或いは、その近似的表現ともいえる「^{なま}生の存在ないし肉の存在」（メルロ＝ポンティ, M.）として把握した。さらに、この体験流ないし存在性のもとで、人間が個として集団として存在し、さらに存在の特性を内的に形作りながら分化していくなかで、そのプロセスにおける滞りや断絶についても詳細に分析することが求められる。

ところで、福祉問題情況とは内的・外的な生活問題の生来である。そのプロセスへの問題解決的働きかけが福祉の行為プロセスである。従って、その底流的未分化状況に発した分化の進行状況における問題の存在故の存在固着や閉塞をさまざまな関係性との開きへ向かって変容させる方途とそのための働きが問われることになろう。存在の内なる志向性の「開き」によって前方志向を可能に

していくことになる。問題解決とはこのような「開かれた関係性」という条件的な作動を前提にして実践される。

このような作用が作動する場を解明していくために、人と人との関係性の間主観的状况把握とその展開を究明するとともに、それと密接不可分でそれを限定する要因ないし諸条件を探求するとともに、最終的にはその全体を念頭に置きつつ、それとの関係性を緻密に辿らねばならない。その究明においては、人間や社会さらに環境との「横の関係性」と、その関係性の個々が志向的に作用を実態化させていく、いわば「縦の関係性」の構築が絶えず意識されねばならない。そこには横の間主観性と縦に構築されていく間主観性がある。そのような情況解明がなされねば、またその解明に依拠せねば、福祉問題の解明から解決に到るときに不可欠とされる「個的にかつ全体的に対応する」という総合的（支援）対応に近接していくことはできない。

この究極かつ絶対的な把握が困難であるのはいうまでもないが、少なくともそのプロセスが詳細に辿られることが求められるのである。

まさに、そのためには福祉問題のトボス論的解明、即ち、全体に作用を及ぼしている核心部分とその作用情況を見きわめる努力の遂行が求められる。上記のように、その情況そのものの空間的また時系列的な完全掌握は不可能である。しかし、問題そのものを、それが包み込まれている全てたる「場」ないし「情況」として捉え、その構造や機能の把握によって構造の論脈と流れを把握することをなして、場の情況解明をなすことは可能である。そのためには、問題そのものを、またそれを担う人そのものを、またその情況を、全体に影響を及ぼす「核」としての「トボス」そのものが、すなわち包摂内容に全体的関係性を持つ様相の本質が縦の関係と横の関係基軸としてまたその相互性における主体相互の関わり即ち間主観情況として把握されねばならない。

それは前述の議論を反芻すると、「トボス情況」（核の所在と作用情況）における一般性をもった拘束条件の考察とそれを特殊化する拘束条件の把握として集約することができる。そこには、複雑に絡まる拘束条件と、それに包み込まれながら切り離せない関係を維持する主体さらにはその主体的存立の有り様としての間主観的人間の相互性の全体情況が縦と横の間主観性の下に総合的に見えてくるであろう。

このことについて関係性の構造的な把握ために用いた前述の「主語—述語関係」によって記述していくと、そうした包み込んでゆく広がりとは、述語的として、またその述語的展開のある部分の特殊化として個々の主語的存立があることが明瞭になる。その主語的存立は自己限定の意識化、さらにその拡大深化という展開を辿るが、複雑に絡まる、自己存在をもその絡まりと密接不可分である場を自己限定しながら、その有り様の生育・成長に伴う展開に応じて、自己統合性を獲得していく。それは、自我領域の統合性に発しながらも、条件性に応じた形で、可能性としての個的、社会的等の統合性を、同時的に保持内在させている。それはシェーラー、M. の論に従えば、人格性の行き着

く「秘奥」的な統合性にまで続く展開を潜在的に内在させている。

ところで福祉支援に即していうと、福祉問題を抱えるその個人に支援者として関わる或いは問題情況に直面している専門集団においても同様であるが、その対応において、上述した場を解明し、そこに可能な限りの科学的対応力を駆使して、問題離脱から良化の条件を探り、その条件設定をなし続けるとしても、その核心においては、自我上の対応を通じながらも、人が潜在的に保持しているその人の可能性への働きかけについての条件を探るということになる。それはその人の個性的な身体の統合的営み、すなわち「身体図式（メルロ＝ポンティ）」への働きかけから潜在的な「身体図式」への生育を求めた働きかけのプロセスをも含み、広がりを持って捉えることができる。さらにまたこの身体図式が人格的統合と連関性を保持することができるまで志向的試みは支援対応として続くことになる。このような可能性に向かう条件整備・設定の高度化を伴う展開の連続という道標を失うことなく、限界を意識しながらできうる限りの科学的対応が駆使されていくのみである。強いて言えば、そこには、現実のなかからの試行錯誤を伴う志向的行為が在るのみであり、さらに換言すれば、統合性に向かう構造的な道標が在るのみであり、それを越えて垂直的に作用する指針に身をまかせる宗教的次元の議論をここで説いているのではない。

これをわれわれは「^{なま}生の存在」に発する本質の核の部分へのさらなる志向性として位置づける。そのプロセスでは、そこに生じる相互的關係性を浮き彫りにしていくことができる。

こうした相互的關係性ととともに、問題情況のなかにある人、さらには集団、その地域環境、制度的環境等を情況内容とする場が存在している。そこでは相互關係性の実質が、その場に影響を持つ「核」に集約されている。Toposとは、これまでも触れてきたように、この「核」それ自身である。包摂情況を述語的と捉えるならば、トポスとは、福祉問題に例を引くと、それに直面する個々人が、個の内奥、集団性、および地域性等々のなかで抱く志向性を絶えず全体性の包括体として包み込む述語的情況の核であると、いえる。それは、そこに見えてあるものから発しても、それが全体の一部でしかないという包括体の解明をなすための足取りのなかにあって、間主観の相互性を何らかの形で整合化へ導く可能性を有し、現実の事象世界に展開し存立していく「情況」を核心であるが故に全体的に關係性を持つという形で包み込み、その作用を可としていく情況の「核」である。このトポスの展開情況とそこに働く核としてのトポスそのものの理解によって、人間存在の間主観性が、個的、集団さらに社会的に整合性を持って明らかにされていく。

ここにトポスを想定（前提）することによって、単なる情況の整合化とそれを基盤にする前方志向性からの離脱が可能になる。古代からの修辞学に言う「論点」なくして問題解明と解決の議論は進行していかないのである。

この論点の所在情況そのものが明らかにされねば問題たる事態の解明はなされない。

論点は主語によって形作られるようであるが、しかしそれは述語的一般性によって包摂されてはじめて存立する。そうはいっても、この包摂は、述語情況のなかに止まるものなのかと問うと、前

述のように決してそうではない。

このことについて社会福祉の現実状況を議論のベースにしながら、次章で詳しく詳細に検討しよう。それは、そこに作用中核として働く主体を明確にしていくことによって、上記の漠とした論に軸芯が与えられ、一層の論理的な明確化が図られることになるであろう。

5 場所論における主体性論——福祉における人格主体論の欠如を内省する

日本における場所論（トボス論）について述べた（その1）第2章で触れたように、中村雄二郎は西田幾多郎の場所論を基底に据えながらも、それを批判的に摂取していこうとしている。それを「現代的地方論（新しいトボス論）」として展開していくにあたり、中村は、トボス論には、3つの場所を考えることが必要であるとし、①存在根拠としての場所、②身体的なものとしての場所、③象徴的空間としての場所を挙げる⁽²⁾。関連する前述の概説的な記述に付加していくと、第一のものは、「自我意識」の「存立基盤」であり、共同体、無意識、等が挙げられる。それは古代ギリシャからの西洋流哲学の本流における主語の論理（主体の論理）では取り上げられることが少なかった述語的世界の論理である。その論理世界はわれわれの「存在の意味された基礎と関係している」、とされる。第二は「①と部分的に重なり」、「意識と身体のように、身体的実存によって、空間的な場所」が「意味づけられ分節化される」という特性を持つ。同時にこれは、第三の象徴的な次元でも生じ、「濃密な意味と有意味な方向性を持った場所」としての宗教的・神話的な空間が存立し、それは「その全体性から宇宙論的な性格を帯びる」。三者の関係を問うと、③～②～①の順にその推移に応じて「空間性を失い、存在論的性格を強める」、とされる⁽³⁾。こうした3つの場所は Topica すなわちアリストテレスの時代から用いられてきた言語の場所理論に通底する。以下のトボス論の展開において、この中村のトボス理解を、詳細な言及はしていないが、各所において参考にしていく。

われわれは、先に、本稿に掲げられた論題に応えるために上記した「場所論」を原点回帰しながら深めるべく西田幾多郎の議論に視座を向け、述語部分の存在性は一般性を持つ、そして主語的存在は個的なそれとして特殊であるとする議論に言及した。西田の概念に基づいて場所理論を、再度一瞥しよう。彼は一般的な特性として場所を定義する。形式論理においては、どんな判断でも特殊としての主語は一般性を持つ述語に包括される。すなわち、それは特殊な存在が述語によって一般化を通じて存在することができることを意味する。

この述語はそれ自身意識の働きである。私、我々、彼或いは彼女のような主語が述語の包摂性、すなわち、意識の流れを通して構成される。西田は、アリストテレスなどに由来する西洋の哲学は何らかの主語的観点から出発しているのに対し、その主語よりも意識の働きが述語のなかで明らかにされることに注視し、そこに比重を置く思索を展開する。そして、私というのは、主語ではなく、述語的統一性それ自身である、とする。

西田流に見ると、述語或いは意識は、Topos（場）として認識できる。なぜなら西田によると場は独立・特殊の主語を包摂して、それ自身に一つの位置を与える論点であるからである。換言すると、特殊なものは自己同一性或いは主体によってもたらされる、ないし自己同一性を保とうとする志向作用のなかに生起する述部の個人的な統一である。したがって西田は自己同一性、主体性或いは主語は作用であり、そこに統合される自分自身の主観（述部の反映内容）においては特殊である、と考えるのである⁽⁴⁾。

この独立した主体的な個人は一般的な意識（述語的世界）によって包括される。しかし、これら二者の関係は topological（位相的）である、或いはそれらは両義性（アンビバレンス）ないし相即状況のなかにある、と考えるのがより包括的或いは全体的な情況理解になる。なぜなら、それは、次第に示されていくように、包まれるものであり、また包むものであり、そのどちらか一方にとどまるものではない、という相互の様相を呈するからである。すなわち、相反する情況の同時存在、換言すると矛盾的同一性（アンビバレンス）という情況特性を有するのである。

このように表現される作用内容を（その1）において触れた新田義弘は、西田の中にみられるフィヒテの要素として論述している。彼はフィヒテの関連考察を要約して、反映されてある「像の本質とは、像と像に映されるものとの有機的統一であり、この統一は、一方の項が他方の項なしにはない、という否定を介して相互に依存しあう構造を持っている。」これが「通徹（Durch）」とフィヒテ（Fichte, J. K.）が言う「見られる限りは矛盾し合うが、それが生きられている限りは、互いに浸透し合い、生ける統一を形成する」事態とされる⁽⁵⁾。

われわれは、次に、上述の議論を展開させるためにも、二者（主語と述部）の関係を一層明確に位置付けることにする。

最初に主語の存立をわれわれが立脚する主体論によって分析してみよう。シェーラー、Mによると、前に見てきたように、真の主体は人格であるとされる。われわれは真の主体を見たり触ったりすることはできない。見ることができるのは自己意識としての唯の自我主体（或いは自我論上の人格）に過ぎない。彼は、本当の主体はただ作用（オペレーション）として存在するのみと考えている。それは物象として対象化（物化的対象化）できない。

シェーラーによるそうした主体的存在の全体は、次のように区分可能である。すなわち、それは、対象化可能な①自我論上の人格、次に（物化的に）対象化できない②個的人格および③社会的統合的人格（総体人格）、さらに④宗教的統合的人格（秘奥人格）の階層的存立によって構成される。

最初の①は客観的すなわち対象化される。そして次の三つ②③④は対象化できない。後者は客体化の及ばない主体的な作用そのものである、とされる。

この階層的人格論或いは主体論を西田の主語・述語関係に照合して紐解いてみよう。

最初の主体的な存在、すなわち自我存在は述語的一般性によって包括される、しかし次の3つの主体においては、それぞれが、述語的自我主体としての存在に垂直的に関わる各統合作用であり、

その下部的統合性を包摂する。ここにいう自我的主体（主語）的な存在は述語的意識界によって包括される、そして、その述語的一般性の拡大を個的な次元においては次のそこに垂直的にかかわる個人的な自己同一性が（包括）統合し、さらにそれと不可分な社会的同一性が（包括）統合し、そして宗教的な統合性が包み込むという段階性を持って、それぞれが前者を（包括）統合する。

しかし、人間存在の現実を把握するに際して、人間存在は、主語的な世界、特に私（I というよりもむしろ Ego）を中心にしてその他の主語を統括し、また述部の一般性をも包括ないし、統括できるという自我を主体とする考え方を他に優先して存在させてきた。これが常態現象として第一に存在する。これが自我主体の林立する世界であり、人間存在の全体はこれらの自我主体群と真の人格主体が層をなして存立する統合性との相互作用、間主観関係から成り立っている。そこには志向の第一段階としての横と縦の間主観性を見出すことができる。この二者による両義性（アンビバレンス）が人間の世界の実質的な位置（場）、Topos 領域の実態状況を形作っている。

前に述べた西田の理論は、最初の自我人格領域を究極に到るまで明瞭に場所論として説明することには成功している、といえる。そうして、彼によると、対象化できない領域、極限に於いて「真の無の場所」⁽⁶⁾ に到るという議論が展開される。「知覚作用が成り立つ」そうした無の場所が、「更に無に於いてある」即ちそこにある無が「真の無」であり、そこに「判断作用が成立する」と考えられている。

彼の見方によると、人間についての自我上の観点を延長した極限において無我という他の世界領域（自我領域を超えた広がり）を説明していこうとしたと言える。自我領域を超えた世界を無として、更にその究極を「真の無」と規定する。これを前述したフィヒテ流の思考を加味して捉えと、「通徹（Durch）」へと到達する道がある。すなわち対立とみられるものが統一を形成する「相即」へ至るという事態がある。それは「生ける統一」としての人格領域と自我領域との矛盾的同時的存立、さらに相互包摂がある、とすることができる。西田の言う無とは特殊化された情況として理解される世界領域である。それは、宗教的作用を及ぼす無ともいえる領域理解である。さらに自我領域とこの宗教的領域とが相互浸透し合うという構図にも達していく、すなわち対象化の世界から非対象性の世界への飛翔が相互浸透的な統一へと至る構図をわれわれはここに把握することができる⁽⁷⁾。この議論は、いまだ未完成であり、おぼろげに描かれたに過ぎない。新田が言うように「現代の問いとしての西田哲学」がさらに問われる必要がある。

われわれの視点からする「無」や上述の「論点」についての比較検討やその詳説は別稿に譲り、以下においては主語述語の関係を、われわれの主体論と対比することがらのみに焦点を当てて作業を続けてゆく。

われわれの世界のこれら自我主体を包括する場は多様な領域に分割される；言語的コミュニケーション領域、個的存在の人格関係の場、社会的世界、物質世界と宇宙的広がり等々。しかし、われわれはここで、この一方向性に疑念を抱かねばならない。上述した2つの領域（意識的自我世界と

それを包摂する世界)ないし場所は生活基点から包摂されていき全世界へと広がりを持つのであるが、この二者の関係性は、上述の、基本的に絶えず人間の自己(我)から出発する即ち自己を基軸に据える、いわば「人間の罪」の現実のなかで、自己周辺の述語的一般化のもとで主語的統合を図り、自我存在が限界領域までの述語的一般世界に包括される状況の拡大を図っている。われわれはこのことに気づかないという、或いは気づいてこれに固執する現象を如何ともしがたい。ここに捉えられる自我世界と無との間には多くの相互関係が存在している。西田の言う無の状態の内部には、そこに至る段階性に応じて多くの相互関係性を把握できる。

人間の自我状況が、絶えず表面化する現状のなかでは、上述の二者(主語—述語)の関係性が、自己周辺の述語的一般化の元で主語的統合を図っている。われわれは、自我存在が限界領域までの述語的一般世界に包括される状況の拡大を図っていることに容易には気づかない。

確かにわれわれの自我主観的な存在は述語的意識界によって包括される。加えて、間主観的な、しかも絶えず両義性の不確かさのなかにある志向性によって、次の個人的な自己同一性、社会的同一性そして宗教的な統一性が、前者の自我的主体を包括するという可能性を与えられている。それぞれの階層には、横の関係性ととともに、志向性を前提として縦の関係性が形作られる。それは、人間の存在が例えば「I」という主語を中心に据える部分とこれら統合作用たる人格主体との相互作用、間主観的關係から成り立っていることを告げ知らせる。

これについて、われわれは、内省による本質へ向かうとする志向性を見出すことができるのみである。これが人間とその世界の方向づけ動静、トポス(Topos)状況それ自身である。トポス状況(場所)は、その核としての論理における論点と同様の作用中心ないし基点即ちトポスそのものとの緊密な関係的浸透によって形成されている。

トポスの核(状況としての場所の中心)とは人間の関係性という作用領域に限って言えば、人格主体の存立を可とする作用内実としての「統合性」そのものであるといえる。その作用基軸が、一定次元の述語と主語の自我的な包摂関係を間主観の道を辿り、層をなしながら包み込んでゆき、さらにそうした客観的な包括性を、志向的人格の統合性によって包括していくというプロセスを辿りながら、存在の高次化がもたらされていく。しかし、無条件の高次元化はあり得ない。そこにある間主観の相互性は何らかの整合化への核として現象世界に開かれて或いは閉じられて存立していることが絶えず想起されるべきであろう。そうした開かれた或いは閉じられたトポスの特性が世界の志向性の現状を決定する。

このような視点から見たときに、現在の福祉理論上の主体性はどのように把握されるといえるであろうか。

結論から言えば、それは場の理論について述語的側面から理解を進めながら、そこに関わる主語的特殊化を自我論上の在り方に限るという内容になっている。そこには人格主体の統合性へ到る道

程が掻き消され、主体への道程、ないし真の主体へ到るまでの思索が希薄となっているという傾向があるといわざるをえない。

従来、自我世界を離れ、シェーラー流に言う対象化をなし得ない「人格領域」とくに「人格主体」を持ち出すことは、形而上学に陥るとして問題視されてきた。一例に触れると、ヴァイトクス（Vai'tkus, Steven）は、その社会集団に関する著書に於いて、ギュルヴィッチ（Gurwitsch, Aron）の「客観世界についての検証されていない形而上学的な人類学的假定」などを取り上げ、シェーラーの形而上学的側面を浮き彫りにし、彼の説に対して手厳しい⁽⁸⁾。さらには彼はシュッツ（Shutz, Alfred）による「シェーラーの相対的な現実世界についての概念は、社会的集団の基礎的、共有的、文化的形態を除外して関係を問う傾向があり、その構成員が相対的な現実世界についての共通な観点を分け持っていて、にもかかわらずその他の様相を分有することなく、さらにこれを知ることがないという事実を説明していないという限界を持つ」⁽⁹⁾ という主張を取り上げて、シェーラーの相対的なままに放置され本質解明に到ることなく形而上の議論に主要論点をゆだねているかに見える論理展開を批判する。

しかし、こうした批判への応答をわれわれは度々試みてきているのであるが、このような単純な批判的思考のみでは、人間主体の一方的理解と、従ってその一面的対応に終わり、そうした論をもってしては特に人間を総合的に支援しようとする福祉論上の実質的支援対応に到ることは困難である、といわざるを得ない。そこには人間把握における偏りを感じざるをえない。

前述しているように、人間は自我論上の主体という心理学的等の対象化を可とする領域にその全体を限る存在では毛頭ない。シェーラー流の対象化できない統合作用としての人格の階層的存立は、個的人格主体、総体的人格主体ないし社会的人格、さらに宗教的人格存在たる秘奥人格として、いかにも垂直的に舞い降りてくる形而上の世界からの人間把握であるかにみえるが、これを志向性と両義性という現象学的、とくにメルロ＝ポンティ流の捉え方で理解していくときに、人間における本質把握へと近接し、見事にその全体を説明することができることに気づくことになる。このことを再度ここに明確に把握しておきたい。確かに、シュッツの言うように、シェーラーの議論は、一見、相対的な人間存立をそのままに放置しているかに見える。両義性のままの存在は、そうした傾向を感じさせる。そうして、これに対する答が、自我的存在からの人格存在への存在参与であるとするならば、これのみで論を尽くしたとは言い難いであろう。しかし、この存在参与が志向性という、フッサール（Husserl, Edmund）からメルロ＝ポンティに至る、特に後者の言う意味におけるパースペクティブの行為化として理解されるときに、人間の存在上の可能性が明瞭に開かれてくる。

そこには、人間における福祉的論点が、価値前提的に働くことの重要性が見えてくる。もし断絶や終局をそこに選ぶとるのでなければ、存在の開きを選び取るのであれば、この議論はその価値前提の下で、先へと展開することを許されることになる。この価値前提という議論の設定そのものは、確かに現象学におけるあらゆる価値から自由になり、それと隔絶しながら本質還元していこうとす

る論理の前提を覆す結果をもたらすとも見える。しかし、われわれは、本質還元の結果における存在の開きを、本質領域に見出し、閉じることなく開くための志向性を前提とする論理的態度に辿り着いたのである。それはまさに福祉上の価値態度として、これまで前提されてきた内容と一致しており、如何なる情況にあり、如何なる問題を担っていようと存在の価値があるという価値態度に基づき存在の開かれた参与の継続という志向性を許されている人間の存在性の本質を示唆している。

さらにもう一点付け加えておくことがある。シェーラーは、確かに、対象化できないと言いつながら、その特性をそれぞれの人格類別に分けて位置づけている。それは、見えないものを見ていることにならないか。把握できないものを把握しているかに見える上述のような理解であるが、これは人格の作用としてその統合性の働きを、両義性のなかに生きながら、こちらの側から志向性によって実質として感じ取っていくことのできる、また感じ取る度に前方が開かれていく限りなき志向性の様態、ないし存在の可能性そのものに他ならない、と理解できる。

この可能性には絶えず試行錯誤が伴い、それは揺れという態様として表現可能である。これは、福祉的生存への志向性を持ち続ける人間存在にとって、換言すれば福祉の人間存在の解明と、その人間存在が絶えず陥る危険性にある情況に絶えず直面しながら進行していく福祉学上の思索にとって不可欠な視点である。

これは間主観の論理的展開を図るときに、より一層明確にされる。こうした内省に基づき、次の章で、上記議論へ投げかけられる疑義にさらに応え、われわれの議論の正当性を明確にする作業へと進みたい。

6 間主観的トポス論の展開可能性——相互主体的生^{せい}：包み込み合う存在性

上述の議論に基づくと、間主観的トポス論への道が開かれていく。われわれがここに把握しようとする福祉実践の「場」とは、相互に主体性を保持しながら或いは主体性へと近接しながら、他者を包み込み合う或いは他者を包摂しようとする、という横の領域の間主観的な作用が縦の主体性の階段状を成す層に添って、間主観的段階を縦と横の相互的關係性として作用展開していくという連関情況そのものである。その進行は人間の主体的な生の展開に他ならない。それぞれの段階ないし次元において、「トポス」は、そうした包み込みの「核」として包摂体の全体に關係性を浸透させている。それは統合作用の重要な要素であるとともに、それが影響を及ぼす次元（の場）を辿って包摂性の密度と広がりを増してゆく力でもある。トポスとは、そうした状況の力動性の核として表現されていく。このことを以下においてより詳細にみていく。

前述の議論に触れたように、「人間存在においては、主語的な世界、特に私・Iを中心にしてその他の主語を統括し、また述部の一般性をも包括・統括できるという自我論上の自我主体が存立する」。人間個々に於いては、ともすればその自我主体における自己肥大的な志向幻想に陥ることも多く発

生する。こうしたことも包括的に理解したうえで、われわれ人間「存在はこれらの自我主体の拡大性向と人格主体の統合性との相互作用、間主観関係から成り立っている。これが人間の世界の実質的な位置（情況としての場）、Topos 情況それ自身である」と前に述べた。自我論上のトポスの位置から見ると、それは状況を包括する核として、包み込まれている全体に関係する。ここには絶えざる志向性が作用しており、それが自我存在の核となり一般性の本源が流れる「自他未分化の体験流」ないし「^{なま}生の存在」「肉」を主語的存立のもとで特殊化する自我論上のトポス的情況との相互的包摂性が存続し続ける。

われわれは、自我主体に軸芯を置いてそこから世界を見ることに終始していることが多い。いやほとんど全てがそうである。しかし、それは存在の底流の流れにおいては「自他未分化の体験流」、或いは「生」のまた「肉の存在」に関わることによって、むしろ自我主体から解き放たれたときには、そこにおいて在ると信じた自我存在ではなく自己にインセプト（incept）された即ち「端緒的な植え込み」による外部から訪れた体験内容によって統御されていることに気づかざるをえない。もしその自我的存立に「自他未分化な体験流」から分化された軸芯が育っているかに見えたとしても、それはそこに存在する人ないし集団の過去の植え込まれた流れとの相互性の下に存立していると見ることができるのみである。さらにそこに「生の存在」とそれに関わる「分化による特殊化された存立」との自我上の間主観が、前方に開かれることによって可能となる将来への志向性の連続を加味して人間存在を捉えるならば、過去からの流れにそった無数の間主観と志向性の下にあって、将来においてそこにあるシェーラーによって「人格」存在といわれる階層状に現出する主体そのものとの間主観が縦・横という無数の織り目となって存在していくことになる。

これについて仮説性を保持しながら段階的に捉えるならば、自我領域から出発しながらも、志向された個の人格の統合性の高度化プロセスと、社会的人格における統合性の高度化プロセス、次には秘奥人格における宗教的統合性の高度化へ向かうプロセスとの間主観が個々の多様性を伴って無数に描き出されていくと表現することができる。この垂直的な統合性は、自我存在から発する志向性の人格へ向かう段階的高揚、それも試行錯誤の道を辿るが、その志向性として前もってあった内実から捉えなおすならば、その到りついた個々の段階（内実）からの統合的自己存立への働きかけそのものともいえるのである。前述した西田とフィヒテの知の本質に関する思索の通底部分を思い起こそう。志向される目的的情況は、現段階の情況を乗り越えているあり方であるゆえに現状とは矛盾する。しかし、その目的的情況は、現状の中に映し出されており、それは志向という作用力を生み出すという結果を生じさせている。それはまさに「見られている限りは、両項は互いに矛盾しあうが、それが生きられている限りは、互いに浸透しあい生ける統一を形成」していくという情況の具体的かつ動的なプロセスの把握といえるであろう⁽¹⁰⁾。

この認識をより現代の現象学に照らして解題していくことにする。それによりフィヒテや西田によるこうした洞察がその観念論上の構図に終始することなく、そこから離脱していく方向へと歩み

始める。

そこにある人格ないし人格主体への志向性とは、本質還元を徹底させていくときにその到ろうとする方向性の一点一点ないし諸点を志向する意識態様（ないし段階）とすることができる。それはその目的的な位置の意識化と価値づけであり、またそれとともに意識されてある内実を達成する方途とそれに添う行為とによって構成されるプロセスである。それが現時点の存在性に映し出され、志向意志の強度の高揚に従って「生ける統一」が生み出され、志向状況の達成への道が築かれていく、というプロセス理解が可能である。そこにある統一とは、到りつく一点の価値と行為化前の原意識との相互性という出発点を捉えるならば、その相互関係性のなかに、価値ありとする位置（場）へ到ろうとする志向意識にある価値を価値ありとする直感ないし思考プロセスが内在するが、そこには行為前の段階状況への目的化された価値からの働きかけと捉えることができる作用を見出すことができる。この作用は自我段階の思惟の働きにすでに備わっている。自我が自らの超越によって、すなわち超越論的主観性によって価値としての到ろうとする一点を経験することが出来る。これはフッサールの説く「持続する人格的自我」にも通じる⁽¹¹⁾。自我は、意識の中で、過去のインセプション（inception）によって培われそこに存在する自己自身、それによって規定される価値選択の影響下には置かれるとしても、おぼろげながらもその意識化を進めることによって前方の価値の一点をとらえ、それによる自己への働きかけとしての自己規定へと歩むという形で前方からの作用下に自己を置くという意識対象の経験をすることができる。それは意識化の明度が上昇することによって、前方からの自己規定力の高揚によってそれと自己を直面させることができるようになる。その道程は自己存在の本質把握、ないし還元の進行と捉えることができる。そうした意識化の下で、ある場合には直感的に、或いは前方の場に到る幾重もの条件整備を伴いつつ道が築かれていくことになる。

そこにあるのは前段階の存在が前方の一点からの働きかけを得て開かれていくという形での「相互浸透」の態様が進行する構図である。

この自我作用は、自我という身体条件の作用の中だけのものなのであろうか。それと連動しながら、さらに先へと進むことはできないのであろうか。

このプロセスをわれわれが導き出そうとする「価値としての統合性」の議論の俎上に載せるならば、前方の一点としてある統合性とそれを価値在りとする一定時点の現状とは、自我存在における主体と志向されて在る統合性としての働きかける主体との間における、即ちそれぞれそこに看取される主体相互における間主観性として把握できる。その働きかけは個の内面から発して広がってゆくが、しかし、われわれはその歩みが働きかけに応じて順当に果たされ続けるという存在の開きを楽観的に受容しているわけではない。これまでの議論において絶えず示してきた両義性というファクターをここで再度想起せねばならない。この両義性は働きかけとしての統合への道の絶えざる揺らぎを、そこにおける試行錯誤、ある場合には存在の閉塞をも伴うことをわれわれに教えてく

れる。そうした態様を内包しながら、前提にされてきた（条件化された）開きが許容されるときに、存在の持続が同時的に許容されてゆくことになる。そうした意味で存在の開きが、還元によって至りうる（方途的ないし手段的）本質であるといえる。

それは、そこに生じる働きかけによる瞬時々々の統合的包み込みが連続していくプロセスとして一面的には把握することができるが、しかし人間相互間及び社会的存立体相互間においては、この間主観において相互に包み込み合うという関係が存在の開きを前提にする限りに於いて可能であることを認識しておかねばならない。それが、人間及び社会における主体的共同ないし相互主体、まさに人間の間、社会間、さらなる大きさを持つ社会間等における間主観性の名に値する情況そのものである。

これが最も高度化した人格次元とされる「秘奥人格」の次元においては、シェーラーに依拠していうと、愛に開かれた人格として、愛の包摂という下部の存立体を包み込む働きと、包み込まれる存在のその受容力の高度化の程度に応じて包み込む力を増すという形で、間主観性が成立していくことになる⁽¹²⁾。そこに「秘奥的な歩みと共同形態」が表出されていく。人間における間主観を通じての包み込む主体への（シェーラー流に言う）存在参与は、その「自我的固執」故の限界情況に絶えず直面し続けるものの、その高度化は対人また対社会への主体的参与を高揚させ、同時にそれぞれの個人における社会領域とは異なる間主観性の高揚をもたらすということができよう。この動的状況とその考察は、単なる形而上学として退けられるような把握ではなく、表現しつくされていないがための曖昧さを残存させてはいるが、間主観性の本質への道程である⁽¹³⁾。

以上のような前提を置いてシェーラー理解を進めても、多くの否定的見解を払拭することはできず、シェーラーの晩年の作においては形而上学的傾向が濃厚になることを認めざるを得ない部分が残る⁽¹⁴⁾。しかし、こうした間主観的理解を、メルロ＝ポンティ流の志向性論の導入等を含め、あくまでも現象学に引き戻して捉えていく時に、それは人間の学における本質解明を果たしうる学的光彩を放つ⁽¹⁵⁾。

こうして描き出される間主観性の広がりやわれわれはトポス情況（核としての場の展開情況）と捉えることができる。それは、相互に包み込む、また包み込まれる関係性の広がりやのエッセンスである。それは、単なる情況の広がりという様態即ち一般としての述語的広がりとしての様態を呈しているかに見える。しかし未分化な情況から、次第に分化し、自我とさらにはそれを統括する人格を働きとして受け止めることが可能となった存在の、その分化がもたらした特性を個性として内包する特殊、即ち主語的存立体が、自我としての主体覚知という情況を経て、各層の統合（人格）主体に包摂されながら、自らもそこに存在参与していくことを可能としていく。これが対人的さらに対社会的存立へと広がりを持ち、述語的態様と、主語的なその特殊体が無数の間を生じさせていく。

このようなプロセスを人格主体へ至る以前の自我世界からの積み上げのもとに見て自我から人格への推移をさらに明瞭にしておきたい。プロセスに目をやるときに、われわれは、述語的態様のみ

が世界を形成するのではなく、そこに特殊として立ち現れる数多の（自我的）主格が、述語世界との関わりの中で世界を創っていくことに気づくことになる。その主語的存立体は、前述したように、自我論上の存在であり、それは「我」と「汝」と呼ばれる相互に出会うような自我を越えた存在ではない。したがって、ここに生じる特殊化は、自我的中心という自我論上の主体に終始する。この段階の主体は未開放状態である。したがって対象化されえないシェーラー流の主体＝人格主体による包摂に応答しそれに存在参与するという開放状態がもたらされることがなければ、それは特殊化と特殊化による個々の絶対視、それに発して自我世界の究極における（偶像的）神々の争いをもたすのみとなる。そこでは、述語世界の広がり重視しそれに包摂されながら生じ存立する主語的特殊を「従」と見るとすると、そこにある意識の開きのなかに生じる志向性の本質とその役割を軽視してしまうことになる。この情況は、福祉論上の情況を例にとると、自我の錯綜に終始し、様態としての流れはあっても絶えず個人的、社会的さらに広がりを持った向上に対して、現情況内のなかで自己存在を閉じてしまうことに繋がる。それは福祉論的に云うならば、自己ないし社会の創造的存在へと向かう Well-being への道を辿り続けるという開かれた道を失うことになってしまう。

主語と述語は両義性を持つ存立体であり、その両者がそれぞれ特殊と一般という特性を持ち、相互に開かれた関係性を保持していくときに、人間、社会、世界の存在がその営みに前方への段階的志向性を内在させ存続していくことができる。そのプロセスでは特殊化の行き過ぎという事態も多く生じるものの、その是正が一般への帰還を持って可能となり、また特殊と見られた内実が一般の位置を取得するということもある。そうして、その開きは、上述のように人格ないし人格主体への開きへと続くものでなければならない。ともかくも相互の関係性が各様の主語に発し、述語に包摂されながらも、限りなく人格へと開かれていくことによってそこに生じる志向性とその連続が生み出されていく。

この背後にある論理がここに於いてはすでに明瞭である。それが上述してきた、人格主体の働きによる各層からの統合性とそれへの存在参与という志向性による相互浸透の論理である。人格の開きが各層の人格に於いて問題にされることは、すでに述べてきたが、この開きを機能させるのは内なる志向性であり、これは前方からの統合性の作用力を前提にしてはじめて機能することが可能になる。その潜在性を引き出すのは、前方にある「無」というようななしかも（宗教的境地にも比すことのできる）絶対無というような（そこに到ることが創造性の極致とされるならばなおさらのこと）存在ではなく、自我主体に発しながら統合性への存在参与を続ける、これが主語的特殊化、主語的個性を随伴させながらも一般化する道程であり、特殊化による弊害情況を乗り越え、述語の一般性というように表現される世界内情況を、自己存在の特殊化を通じて個性的な開放によって開花させる（創造的）道筋に他ならない。たしかに、絶対無を心に宿すことによって、或いは、述語と主語の究極に自己存在を浸透させ、自己滅却に近づくことによって、無限に開かれた自己存在を心に宿

すことは一つの悟りの境地、創造の極致への道を形作るともみえる。この段階の絶対無とは、宗教的態度の設定に他ならない。しかし、前方の究極に於いて秘奥人格という人間存在の人格上の参与的存立を働きかけとして捉える歩みのプロセスと、上述の無へのプロセスは、そこに至りつく場においては全く異なる。そのように到達上の違いはあれ、現にそこにある自己の内的態様の無としての存立条件設定と高次人格への存在参与によってもたらされる「内的態様」を捉える限りに於いては、両者は近接し、相互浸透しながら、志向の強度に応じて前方の統合性へと歩んでゆく可能性を持ち続けると考えることもできる。そこには「生きられている限り」において、すなわち前方指向性を持つ限りにおいて、われわれの意味における「生きる統一」の態様がある。

以上のことをわれわれが福祉実践上のプロセスに照らして理解するときに、とくにその援助技術の実践という具体に照らすときに、明瞭に具体の次元で指摘していくことができる。個人、集団、社会ないしコミュニティ、さらにはそれを越える諸次元において、ワーカー/クライアント関係という一般的援助技術の関係を例に一言しておく、両者の関わりを上述した議論の流れの下に捉えるならば、支援者と生活問題を抱えた人という形体化した類別を越えないしその類別の否定から始まる、或いは存在の本源にある相互性に帰ることがなければならない。両者の協働志向性をそれぞれの立場において探るという条件形成においてはいくつかの専門技術的な対応が必要であろうが、それも相互主体的に、相互の人格的協働を探る道に立つときに、物化的対象化が防がれ、かえって包摂関係とそれを基盤とした高揚する人格への参与が達成されていくことになる。こうした高揚する統合性への段階的積み重ねの各状況をわれわれは社会福祉におけるトボス情況ないし全体的俯瞰のもとに「トボス」と呼ぶことができる。それは相互的包摂の場であり、より具体に踏み込んでいうならば、まさにそうした場は多くの人々に開かれ、人々の訪れを待つ地域の日常の中に備えられ、そこから出発していくことが求められる。「ソーシャルワーク協働の思想——“クリネー”から“トボス”へ」という方向性のもとで地域のなかの Recover の場をトボスとしてとらえていこうとする柏木昭の思想はこの具体をよく表現している⁽¹⁶⁾。

ところで、以上述べてきたのは確実に価値作用を前提にした議論である。述べられているのは価値に基づく倫理学上の議論ともいえる。それは、この論の表題にも明記されている福祉価値に他ならず、そこには存在の持続的存立とその存在の Well-being が、その形態は様々であるが前提されている。したがって、この論はその価値前提に基づく、その範囲内における福祉倫理学上の議論である。この議論と現象学の本質還元との関連については前述しており繰り返さないが、場の議論と関連させながら福祉実践上の価値論について少しく述べておく。そのことをこの章の最後に明示して結びに到ることにしよう。

社会福祉実践においては、その実践が展開される場として生活問題状況がある、またその問題を担う人々がいる。これを述語ないし述語の一般状況とし、さらにその状況が人の存在と相互的に関わる特殊状況即ち主語的情况に関する脈絡のなかで捉えることにしよう。この試みによって、問題状況という場に即して価値的態度が本質への還元の中で明瞭になる。

そこでは問題およびそれに関わる全状況とその担い手が場を形成しており、その人は苦痛或いはあきらめ等という場に関わる意識状況のなかにあっても、場に飲み込まれない主語的自己を、一般状況としての場にとっては特殊という位置を何らかの形で保って存在保持をしている、或いは危機に直面し、崩壊状況に直面しているということもあり得よう。ソーシャルワーカーは、ここにいう場にとっての特殊に対応しながら、一般性との整合化、或いは一般性を越えて特殊を生かす道の協働者として生活上の困難に対して自立支援をしていくことになる。個においては、自我主体としての主体の芽吹きに始まり、次第に統合主体としての人格への道を辿りながら、間主観的關係性の中で、一步一步が刻まれていく。これは見定め、これと指さすことはできないが、「生きられている限り」においての統合化主体への志向的作用に始まり、現状の苦しみ、絶望や苛立ちという述語的情况への意識の様態と密接不可分な客体状況からの離脱というプロセスが自立へ向かって可能性を持ち始める。こうした主体力への支援こそが、その人の Well-being（問題状況への援助・回復・予防といった対応から状況のさらなる克服・良化を含む）を目ざす支援の実践に他ならない。

この福祉実践とされる行為は、生活上の困難性というニーズを持つ人或いは人々への支援という形態を持つが、それは、そのニーズへのその人或いは人々による自立的な働きかけの条件を緻密に間主観的關係のなかで築き上げていくプロセスに他ならない。それは対象化できない汝の人格との間主観的關係の持続的な遂行によって可能になっていく。こうした行為は個別支援或いは問題当事者の小集団形成を用いた支援においても、その個々の述語的情况に付着する生活上の困難をもたらす要因に対し、当事者ないし主語としての自我論的自己からの働きに発することになるが、そこからの道筋を辿りながらも、さらなる主体、すなわち対象化できない可能性としてのまた潜在化している主体へと歩みを辿っていく。そうした歩みは、直接的なその人への支援としての心の操作ではない。特に真の人格は、対象化できないという前記述を思い起こしてほしい。対象化し操作対象とすることにより、心の物象化が始まっていくことに思い到らねばならない。それは、人格作用が作動するための条件を探る、その人の或いはその人々の歩みと共同歩調を辿りながら、条件を探り見出していく希求の行為化に過ぎない。見出し、力を取り戻し（recover）歩み始めるのはその人、或いはその集団主体に他ならない。間主観の粋を尽くした、共感に基づく条件設定の細やかさが、支援の実質化における鍵となる。ここには、間主観關係の広がりと深まり、そうしてワーカーと問題当事者の間に包摂關係が顕現していくプロセスがある。それは包まれるものが包み込み、包み込むものが包まれるものとなる主体的包摂關係であり、これは主体的共同の実質としてのトポロジー的關係性といえる相互性である。このような關係性は既にメルロ＝ポンティによって直感され、そう

した関係を内在させる存在論上の解明への糸口が開かれている。かれは、これを、「均衡とか包摂などといった関係が限定できる場である位相空間は、クレーの色斑のように、すべてのものよりももっと古いと同時に『[生まれたばかりの] 最初の日に』（ヘーゲル）あるものでもある存在」と表現している⁽¹⁷⁾。

これをわれわれは、福祉実践上のトボス情況と表現することができる。福祉実践の地場的場が「トボス」として語られるとき、それはまさにわれわれの言うトボス情況への開拓の実質としての意味を持つ。こうした実践は確実に歩まれている⁽¹⁸⁾。この相互行為が存立する全体を、包摂され、包摂しながら切り離すことができない包摂体として理解するとき、その全体包摂内容の「核」をアリストテレス以来の場の理論にいう「トボス」そのものと理解することができる。

その「包摂体の核」を「情況内的主軸」ないし「主体そのもの」として理解することができ、強いていうならば、志向性の試行錯誤のなかで辿り着くことのできる、プロセス上の隠れた情況における主体がトボスである。それは内なる領域を包み込み関係し、統合へと向かう、或いは統合している。またトボスは、核としての主体同士の相互性が形作る状況を伴う。主体間の包摂関係が、関係性の内部と言える状況を包摂する間主観性が関係性の個々には成立しており、それは関係性の拡大とともにさらなる拡大を遂げる。トボスは、このように絶えず現状況を越えて包摂を拡大していく趨勢を持っている。人間の関係性が存在する情況においては、まさに間主観性の階層を辿る態様趨勢と同様な動きを呈するのである。

以上のことは、単にワーカーと当事者といった個々人の間や困難を抱えた小集団とワーカーとの間を例にとって述べた事柄に止まるものではない、地域社会内の問題を抱えた集団、社会集団、コミュニティ、さらに国家集団間、さらに世界へとその領域は人間の関係性の存在する情況全体に渡って捉えていくことができる。マクロに視野を広げるばかりではなく、ミクロに於いても、細やかに見ていくと、述語的情況の差別様態とその中に生きる人々についても、また制度的不備に起因する問題情況のなかでまさにそれに飲み込まれて生きる人々についても、或いは職場の関係性に悩む人々についても同様なことがいえる。そこにおいても、無数のトボスがあり、内部的には、情況まさに述語領域に対する主語の自我機能が働き、さらにそれに統合的包摂として作用する人格主体が他との包摂的主体関係を形作る可能性を持ちながら存立していく。自我主体としての主語は、人格存在とその主体への存在参与の道を辿る可能性のもとにあるが、それは、上に述べてきた実践プロセスに照合して理解するときに、その人格上の実質に照らし、自我上の真なる論旨（論点）を明瞭にしていくことができる。そこには包摂しながらまたされながら、包摂し合う間柄のなかで相互を包み込む作用の核（われわれはこれをも論点と云うことができる）が作用し合っている。上に述べたように、トボスを間主観性との関連において捉えるときに、それは明瞭である⁽¹⁹⁾。

このように、トボスとは、層を形成しながらわれわれの部分世界に関わる様態の核である。述語的狀態のなかにある間主観の条件としての事象に目を向け、その包括力と、自我主体次元の主語に

よる包括力、さらに層をなす人格的次元における間主観の条件としての述語的包括力、また人格としての主語による包括力、それぞれに部分としてのトポスが存立する。それは必ずしも統括性を持つ核という形態を取るばかりではなく、散逸的かつ多様性を持つ場合もあろう、それはそれとして、多様性を持つ特性としてその位置づけを一定の態様における核として表現することができる。その全体包括性をもってトポスということができる。さらにまたそうしたそれぞれの部分を包括するトポスが志向性のもとで成立していくと考えることができる。

トポスとは、その相互関係性、関わりを持ち合う存在の要諦にあり、まさにそれぞれの包摂体の中心点を意味しており、その中心の位置故に全体との関わりを持ち、それを包み込んでいると見ることができる。さらにいうならば主語―述語関係性を持ちながら存在する自我主体間さらに人格主体間の相互性における間主観性の関係性の核そのものとも言えるのである。このようなトポスを現実事象の間主観性情況のなかで探求し、解明していくことにより、われわれは現実の事象の本質に段階的に辿り着くことができる。それにより、事象内の改善改革、福祉問題状況からの離脱の糸口に立つことができるのである。

ここでその解答は既に明らかになっている。そこにいう関係性の核とは、まさに統合性という外見上の言葉で捉えられる作用そのものでしかないことは明らかである。トポスとは一般性という場を発しながら、それを包摂し、さらに人格的統合へと到り、またさらに人格主体間と切り離すことができないそのさらなる上部からの統合性という包括力そのものである。その作用力が場ないし情況であるトポス（核）という本質の下にあることを明確に把握することができる。

この理解によって、われわれは上記したように、多様な福祉上の実践の糸口に立って前方へと歩み出すことができる。こうして、われわれは対象化できないその人、人々の人格を念頭に置いて、その作用の作動へと向けた条件設定への旅立ちを許容されることになるのである。それは現実にある或いは求められているトポス状況の解明という門を開くことによって開始される。それは包摂状況の解明であり、心理的側面は言うに及ばず、経済的、社会的ある場合には政治的等々のその人が置かれた場であり、またそれはさらに詳細にみると内的・外的広がりを持って包摂体にちりばめられて有機的に存立している。

われわれは、人間の存在におけるトポスを間主観的に解明することによって、その一見散逸して存在するとも見える諸条件の構成状況をトポスに向かって即ち人格統合性に向かって条件付けながら力動化する支援的な実践者という役割内容を獲得することができる。これは既に優れた実践者の実践上の在り方に看取される在り方に過ぎない。ここに示されるのはその論理的な堅固化を図る試みに過ぎない。

結び 福祉実践の場としてのトポス的な情況

われわれは生活問題の解決による「困難の克服」とそれに連続する Well-being への道という方向性ないし価値を前提に、そこへ至る方途の探求を福祉実践のプロセスとする。その福祉実践はたえず「場」によって包摂されるとともに、新たな場を形成していく道程である。この小論において意図されていたのは、底流においては、「福祉実践の場」の現象学的形態解明であった。福祉実践に於いては、問題が発するまたその問題を解明・解決していく「人の生きる場」の実質把握がきわめて重要である。そのためには現象学的還元に基づき、「場」の本質へ迫ることが要請される。われわれはその本質を間主観的に把握された人間存在の態様における「トポス情況」として明らかにしようとしてきた。そうしてそれが主体と主体間において展開されていく相互包摂性、さらにはその主体（主語）それぞれを包摂する一般性としての述語的条件、また、さらに自我存立状況を越えて展開していく人格主体の各階層において可能性を持つ包括的な統合関係とそれを包括する述語的一般条件といった主語—述語関係の相互性、さらにまた包括性の複雑な絡まりに理解を広げていくことができた。

このような思考は、ことさら福祉実践という人間の関係性、人間と集団の関係性、さらにはコミュニティという表現に代表される地域との関係性、また国内的関係性レベル、それを越えた諸国との、世界との関係性を問うときに、本質把握という意味を持ちつつ様々な対応における変更や改善を迫る在り方として示唆を与えることになる。

それは主語と述語、主体と情況の関係性として一般化することができるが、われわれの観点からすると、この両者の包摂関係が情況としての場をつくっている。そうしてそれぞれが主体化へと高揚する程度に応じてこの包摂関係には横と縦の広がりが構成され、包摂の広がりや密度が増していく。それは一般的情況と統合主体との両義性のなかにおける主体への志向性の進行ないし高揚によって形作られていく。両義性とそこに生じる揺らぎは一方的な方向性に終始しない歩みを示唆するが、この揺らぎもここにいう包摂の度合いを増していく重要な働きであることを知らねばならない。この相互包摂が間主観の様態であり、さらにこの様態そのものを場とし、包摂体のそれぞれに位置を持つ核としての「トポス」とその核の影響下に形作られる場を「トポス情況」と呼ぶことができる。強いて言うならばその核としての主体的（統合的）位置が、即ち層をなす人格的統合性がトポス情況の要（核）としてのトポスそのものといえる。

本論の副題とする福祉問題情況の解明と問題解決のためには、このような視座が大きな示唆を与えてくれる。われわれは福祉状況の分析においてトポスを探らねばならないからである。生活（福祉）問題が存在する、まさに情況としての場を通じて、その場の核を明らかにし、その核の状況が

関わる関係性を間主観的に解明し、主語的位置と述語的位置を見きわめながら包摂状況を知るとともに、志向性を持って次の段階の包摂状況を探るとともに、それを形作る状況形成を可能とする人格の相互形成へと歩を進めてゆくことを課題とする。縦と横の関係性の下に、このプロセスを辿ってゆくのが生活問題の予防、回復、支援から一層の Well-being へと向かう福祉実践の実質的行為の基礎となる。この視点によって、一つ、一つの福祉実践がその道筋の検討と是正策を見出すことを容易とすることになる。

その実践に於いて、ソーシャルワーカー（支援者、特に専門的支援者）は、問題を担う人への「寄り添いびと」であり、人格へ向かう条件の形成を共感のなかで行うことによって人への支援をなす実践者である。ことさらそのような実践上の働きかけをするに過ぎないことを絶えず心に留めておかねばならない。人格的統合性の下にあって内側から強められ、empower ないし strength への道を辿る。そうして recover（困難から復帰し可能性に帰着する）していくのは、その人、その集団、その地域の住民そのものである。その条件への支援者としての福祉実践者は協働者としてある。こうした福祉実践の道は、トポス情況（場）による包摂の核として相互的に存立している統合作用としての人格主体の存在条件に向かい絶えずその開きのための働きかけをするときに実質的に辿られる。

言葉を換えれば、絶えず「トポス」という人間と社会の「情況の核」へと志向の行為を辿り続ける支援者に徹するときに福祉の行為に近接していくことができる。

注

- (1) 牛津信忠「共感的共同の現象性と基底について—福祉実践の場についての間主観的考察」聖学院大学論叢第22巻第2号、2010年。226頁。
- (2) 前掲中村著「トポス論」213頁。
- (3) 同書216頁。
- (4) 同書320-321頁。
- (5) 新田義弘「現代の問いとしての西田哲学」岩波書店、1998年、29頁。及び新田義弘「深さの現象学—フィヒテの後期知識学における『生ける通徹』の論理」思想（岩波書店）1986年、No. 749、5-7頁。ここにいう通徹を、かつて隈元忠敬は、「互通」と訳し、フィヒテの光と映像についての議論を引用しつつ対立の統一に注目した。「統一によって映像と被映者との融合を、『間』によって両者の分離を示しつつ、しかもこの二つの観点を相即せしめることによって、統一の裏面に間の特性を付与し、逆に間の裏面に統一の特性を与える」と理解し、存在と意識の統一に関する議論へと至っている。（隈元忠敬「フィヒテ『全知識学の基礎』の研究」溪水社、1986年、310-312頁）
- (6) 前掲、西田幾多郎全集第四巻所収「場所」267、271頁。
- (7) 前掲同書「現代の問いとしての西田哲学」、28-30頁。
- (8) Vai'tkus, Steven, How is Society Possible? Intersubjectivity and Fiduciary Attitude as Problems of Social Group in Mead, Gurwitsch and Schutz, Kluwer Academic, 1991, pp. 54-55.
- (9) ibid., p. 84
- (10) 上掲「現代の問いとしての西田哲学」、29頁。

- (11) 立松弘孝編「フッサル現象学」勁草書房, 1986 年第 5 章（千田義光著）231-232 頁。さらに同書第 3 章（新田義弘）にいう志向性に関連する目的論の原型についての表現をも参照。「フッサルは志向性に認識作用としての役割を見出すことによって, 志向性が単に意味を思念するだけの働きだけでなく, 思念された意味を直観的に充実することによって対象を現にそこに存在するものとして把握する働きを持つことを主張している。」142-143 頁。
- (12) 前掲シェーラー著作集 3 「倫理学における形式主義と実質的価値倫理学」下, 白水社, 2002 年, 292-299 頁。
- (13) 牛津信忠「共感的共同の現象性と基底について」聖学院大学論叢 第 22 巻第 2 号 222-223 頁。
- (14) 金子晴勇「現代ヨーロッパの人間学」, 知泉書館, 2010 年, 63 頁。
- (15) 前掲「共感的共同の現象性と基底について」214-216 頁及び 223 頁。
- (16) 柏木昭・佐々木敏明「ソーシャルワーク協働の思想」“クリネー” から “トボス” へ。ヘルス出版, 2010 年。
- (17) Merleau-Ponty, Maurice, *Le Visible et L'invisible suivi de notes de travail*, Éditions Gallimard, 1964, 滝浦静雄・木田元訳「見えるものと見えないもの」みすず書房, 1989 年, 303 頁。
- (18) 前掲, 柏木昭・佐々木敏明「ソーシャルワーク協働の思想」87-88 頁。
- (19) 間主観の理解の範囲内における自他未分化の体験流と述語的世界の繋がりについて一言しておく
と, 両方とも一般化の世界に他ならない。そこからの分化, 特殊化による主語の発生から自我主体
へと展開は進んでゆく。主語的存立体とは自我主体の世界, さらにその人格への飛翔としての存在
参与, 出会いの連続, 対話の世界, それから人格主体的存立へ繋がる。この相互関係性における主体
間の状況を間主観と呼ぶことができる。個々に働く, 或いは作用している論点を, トボスと言うこ
とができる。したがって, それは, 述語的世界に作用していく, 次第にその作用を明確にし, 作用的
高度化をたどっていく統合力としての核という理解が可能である。これの作用する場がトボス情況
そのものである。